「訪中を終えて考えたこと～「円」と「元」と「縁」～」

3－B　筑波大学　大倉成童

こんなに充実した 7 日間がかつてあっただろうか。この旅を振り返るにあたり、真っ先に頭に浮かんだのは、この言葉だった。たった一週間とはいえ、私は大いに有意義な時間を得ることができた。以下、私がいかにして充実した時間を送ることができたか、そしてこの経験を今後どう活かしていくか述べようと思う。

外資と上海

おおよそ世界中どこの国に対しても言えることだが、中国（中華人民共和国）と一言で言っても、位相、文脈あるいは地理空間など見方によって様々な顔を持つ。今回の訪中事業では、主に上海市・山西省（太原、大同、晋中）・北京市を訪れる機会を得た。もちろん、この 3 箇所の訪問のみをもって中国とはいかなる国かを断定することはできない。しかし、ある特定の視点をもってそれぞれの地域を観察・比較すれば、そこがどのような特徴を持ち、いかなる活動の場になっているかを見つけることはできる。

例えば、上海市（特に浦東新区中心）を挙げよう。中国経済、もとい世界経済の中心地であるこの都市は、圧倒的に外資によって支えられている。移動中のバスから見えるのは、「ベンツ」「ソニー」「イプサ」「資生堂」など外国企業の看板と高層ビルばかり。90 年代後半から急速に発達した長江デルタは、国内制度の大幅な緩和に伴い個人・私的企業の族生、郷鎮企業＝国営企業の衰退、外資の参入を招き、浦東地区をはじめとして巨大な「上海経済圏」を築き上げてきた。「不管黒猫白猫，能捉到老鼠就是好猫」とは改革開放期の鄧小平の言葉とされるが、まさに市場経済で社会主義国家を維持する戦略の最前線を肌で感じることができた。

地方と土地

山西省は、雲崗石窟や平遥古城をはじめとした歴史的遺産や、市内では昔ながらの店が立ち並ぶ由緒ある土地である。省内の街の様子を観察して気づいたのは、圧倒的に高層ビルの建立数が少ないことである。この理由について、あくまで個人的な仮説だが、地方政府の収入における不動産関連収入の大きさから推測できるのではないか。基本的に社会主義国家では土地の私有は認められない。したがって、土地は政府が人民に貸し出すという形式をとる。そこで地方政府は不動産業を開拓し、土地を高く貸し出して多くの収入を得ようとする。その結果、地方財政の多くは土地収入に依存することになる。多いところでは歳入の 7 割近くを不動産収入に頼っており（2014 年度のデータによると浙江省：約 66%、天津市：約 64%、山西省：20%）、土地価格を容易に下げることが難しい状況になっている。近年話題になった中国での不動産バブルは、この地方財政と密接に関係しているといえる。その点、山西省はこの不動産収入への依存度が低い。逆に言えば、消費者の土地への需要、あるいは

土地購買力が低く、土地への投資がなかなか進まないのが現状だと考えられる。しかし、これらはあくまで仮説であり、今後十分に検証を重ねる必要がある。

政治と経済

また、都市を散策していて気付いたことだが、党の方針を街中に大きく表示して宣伝するということが、重要都市、首都、地方関係なく頻繁に行われている。これは一見すると、全体主義国家の悪しき風習のように解されるが、地方（農村）と都市の格差が激しい中国では、必要な戦略であるとも言える。先進国によくみられるが、ある社会において経済的位相ばかりが強まると、人々は共同体的なつながりから切り離され、単なる合理的な対象どうしでしかなくなる。その結果、人々は孤立し自殺や狂気に走りやすい。特に、農村出身者にとっては、それまで家族的共同体に守られてきた環境から、孤立を強要される立場に突然立たされるため、その精神的負担は非常に大きいだろう。その点、党のプロパガンダは国家という共同体的な意識を人々に再帰させることで、市場経済での精神的負担を少しでも軽減することに貢献しているのではないかと思われる。同時に、過去 5000 年間も分裂と統一を繰り返してきた中国にとって、国家の統一と安定化は非常に重要なことである。以上の点から、私は必ずしも党の大々的な宣伝方法が誤りだとは思わない。ただし、宣伝内容が明らかにナショナリズム的であることについては、議論の余地はあるだろう。

わたしと今後

経済、政治、文化、人との交流・・・当然ながら私の中国への好奇心は 7 日間ではとても収まり切れない。したがって、これから数年、もとい数十年かけて中国を知り、人と交わり、探究を続けていきたい。まずは、語学と中国政治・経済の勉強に専念すること、次に今回訪問できなかった地に自分で足を運んでみることを当面の目標とする。そして何より、今回出会えた訪中団の最高の仲間たちと共に、日中交流のよりよい未来を築いていきたいと思う。

「中国の旅から学んだこと」
３－B 大阪芸術大学 長陽日季

1週間中国に訪問させていただいて感じたことは、全てにおいてスケールが大きいということだ。歴史的建築物や1つの料理にしても全てが日本人の想像を超えてくる。その壮大さ、大陸ならではの価値観を肌で感じられる1週間だった。
まず、私たちは上海に訪問した。
上海金茂ビルは高さ約３４０ｍで、そこから見られる景色は、日本では決して見ることのできない広大な土地に東方明珠塔や高層ビルが一望できる。そして上からだけでなく、下からも船に乗って街並みを見た。日本人からすると地震のことがよぎりそうなくらい煌びやかなビルが立ち並んでいて大陸の中国だからこそ成り立っているのだなと感じた。中国の中でも上海は治安が良く、夜でも女性 1 人で歩くことができるそうだ。それが納得できるほどに上海はとても整備され治安維持されている街であることを現地に行って実感した。
次に、山西省へ訪れた。
上海に比べると空気が乾燥していて、同じ国内でもこれほど差がでることに驚いた。山西省には沢山の歴史的建造物や文化遺産がある。そのどれもが壮大でかつ細部までこだわりぬかれている。中でも特に印象深かったのは、平遥古城だ。まるで清朝時代にタイムスリップしたかのような感覚になった。自分が歩いている場所に２８００年以上も前の人が生活していたと考えるととても不思議な気持ちになる。しかし今でもそこに住んでいる人たちも見られて衝撃を受けた。また、山西省大学の方たちとの交流では、拙い中国語を読み取って理解しようとしてくださって、その積極性や親切心に感動した。短い時間のなかで、少しでもコミュニケーションをとろうとする姿勢にとてもエネルギーを感じた。日本人はこのような時に話しかけてもらえるまで待っている受け身の姿勢をとりがちだといわれているが、自分から何かを得ようとする中国人の積極性は私も見習うものがあると強く感じた。
そして、最後に北京へ訪問した。
日本よりも発展していて進んでいる街だと単純に感じた。全てが電子決済ででき、人口の多さを管理するための政策が浸透していて、維持されているのだなと思った。北京人民大学の学生の方々と交流する際に、日本のドラマや歌、アニメが中国の方々にもたくさん見られていることを知って、とても嬉しかった。お互いのことを完全にはわかりあえなくても、共通の話題1つで笑い合うことができた時、何か壁を乗り越えた気がして感慨深かった。また、最後に訪れた万里の長城では映像でしか見たことがなかったものが、目の前に広がっていてとても感動した。実際に登ってみると、思っていた以上に1段1段が高く、かなり傾斜があって驚いた。縦というより横にだだっ広く続いているイメージだったので『百聞は一見に如かず』を改めて感じた。果てしなく続く階段は文字通り万里の長城で、中国の歴史の長さを実感した。
私は訪中前に大学の中国語の授業で文化や言語を勉強していたが、どこか中国に関する報

道などに惑わされ、正しく理解できていなかったように思う。このような経験を通して、実際に自分の目で見て確かめることの大切さを学んだ。表面的なものだけでなく、中身まで深く相手を知ろうとする姿勢は、友好関係を築く上で欠かせないものだと、今回の訪中団で実感した。この経験を忘れずに、中国との交流を深めていきたい。

「初めての中国で得たこと」

3－B　北海道大学　曲藍里

今回の 7 日間の中国訪問を通じて、私は中国に対する印象の変化と、日中友好に関わらず人と社会で生きる上でのコミュニケーションの大切さを改めて実感しました。

まず、訪中を通して変化した、中国に対する印象についてです。私は祖父が山西省出身であり、私は幼い頃から中国文化が身近にありました。しかし祖父は私が生まれる前に他界しており、直接中国語を聞いたり、話をしたりする機会はありませんでした。また、中国へ実際に行く機会は今まで一度もなく、今回が初めての訪中でした。祖母や両親、親戚から中国の話を聞いたり、日本では馴染みのない本場の料理を食べたりする機会が幼い頃からあったので、念願の訪中でした。

日本にいると、世間の中国に対するイメージは様々だと思います。メディアからの印象や、日本で目にする中国人観光客など、限られた情報源からの知識に基づいてイメージされる傾向にあります。私も、自分のルーツが中国にあると言っても、実際に中国に行くまではネガティブなイメージも持っていました。歴史や政治情勢は難しく、日本と文化や常識が異なるため、中国に限らず世界の国々には漠然と怖いというイメージがありました。正直、今回の訪中を通じてネガティブなイメージが完全に無くなったとは言い切れないものの、中国の良いところ、好きだなと思うところが新たに沢山見つかった経験となりました。

次に、私は今回の訪問で、コミュニケーションの大切さを改めて実感しました。これは、日中での交流、日日での交流の両方から学んだことです。私は、今回の訪中で、興味を持ったことや疑問に思ったことが会った時に自分の言葉で積極的に現地の人と話すということを、目標の一つとして掲げていました。

私は中国語を大学で一年間学び、日本中国語検定協会の中国語検定 3 級を取得し、文法や単語の勉強をしました。しかし発音やリスニングが難しく、日常会話には自信がありません。そのため、現地の人の話を聞き取ることは難しいとしても、なるべく単語だけでも聞き取って、身振り手振りを使ってコミュニケーションを取り、知ってる単語で会話することを目標としました。7 日間、同室であった友人も、中国語の勉強の経験があり、現地の人に「这个用中文怎么说？」と積極的に話しかけていました。その姿はとても刺激的であり、私も頑張ろうと思わされました。

中国人に対して、今までは物事をはっきり言う、声が大きい、観光地などでは日本人に対して不当な料金を請求するなどのイメージを持っていました。しかし実際には簡単な挨拶やお礼を言うと笑顔で楽しそうに話しかけてくれて、とても優しい方が多い印象でした。

一般の市民の方と触れ合う機会はあまりありませんでしたが、現地のガイドさんや訪問先の職員の方、ホテルの方もとても優しく嬉しかったです。2 日目に上海の田子房を訪れた際に、私は小さな小物屋に入りました。初めは店員さんが少し怖いなと思っていましたが、話しかけるととても優しく、お菓子をくれたり、一緒に写真を撮ってくれたりしました。

山西大学や中国人民大学で交流した時には、私たちはなるべく使える中国語で自己紹介などをしました。交流で仲良くなった学生さんとは、若者が使う流行り言葉を中国語と日本語で教え合いました。お互いの地元の話をしたり、wechat を交換したり、短い時間でしたが仲が深まってとても楽しかったです。

山西省の対外友好協会の方とお話しする機会がありましたが、リスニングが苦手な私はあまり上手く聞き取ることができず、自分の言いたいことも伝えられず悔しいと感じました。言語を学ぶのは簡単ではないけれど、もっと多くの人と話したいというモチベーションで、中国語の勉強を続けていきたいと強く感じました。

国が違うと、互いに様々な偏見があると思います。しかし、実際に自分の言葉や身振り手振りでコミュニケーションを取ることで、違う国、文化の人との心の距離を縮めることができました。

日日友好も今回の訪中ではとても充実していました。同じ班の友達とは 7 日間で絆が深まり、この先もそれぞれ拠点は違うけれど定期的に会いたいと思える仲間ができました。また、移動や食事の場で他の班の人とも交流があり嬉しかったです。引率の職員の方々にも沢山話しかけていただき、とても嬉しかったです。今回の訪中で出会った全ての出会いに感謝したいです。

加えて、中国人民大学でのパフォーマンスがとても印象的でした。私たちの訪中団のパフォーマンスはとても感動的でした。ここで初めて出会った学生が、協力して練習を重ね、仕上げたということに心を動かされました。また、私は大学で中国舞踊のサークルに所属しているので、本場の中国舞踊や太極拳は非常に刺激的なものでした。音楽や踊りの感動は世界共通なのだと改めて実感しました。

この旅で私は中国がより好きになりました。隣国である中国との付き合い方は難しいけれど、民間人の交流はこんなにも温かく素敵なものだと知ることができ、自分たちにできることは何か考えるきっかけになりました。メディア等からの知識だけではなく、自分の言葉で話し、自分の目で見て体験することで、より深い相互理解につながると考えます。

最後に、このような貴重な機会をくださった日中友好協会の皆様、推薦をしてくださった北海道日中友好協会様、関わってくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

「訪中で得たもの」
3－B　フェリス女学院大学　児島結

大学一年の前期、私は第二外国語として中国語を選択しました。当初は、漢字文化に対する親しみや、アジアの中でも重要な位置を占める中国への関心から選びましたが、実際に学び始めてみると、その奥深さと発音の難しさに戸惑うことも多くありました。しかし、後期からは中国語のインテンシブコースに進み、週に 6 コマというハードなスケジュールの中で集中的に学ぶことで、少しずつ自信もついてきました。
そんな中、今回の中国訪問は、私にとって非常に大きな経験となりました。上海、山西省、北京という三つの地域を巡り、それぞれの場所で観光地や大学を訪問することができたことは、語学だけではなく、文化や人とのつながりに対する理解を深める貴重な機会となりました。
まず訪れた上海では、遊覧船に乗りながら黄浦江の夜景を眺めました。ライトアップされた高層ビルが水面に映る景色は非常に幻想的で、「これが世界に誇る大都市・上海か」と圧倒されました。教科書やニュースでしか知らなかった中国の現代的な姿を、目の当たりにした瞬間でした。
次に訪れた山西省では、田子坊という昔ながらの街並みが残るエリアを散策し、中国の伝統的な生活文化に触れることができました。そして、山西大学を訪問した際には、現地の学生と実際に会話する機会がありました。自分の中国語がどれだけ通じるかという緊張感もありましたが、お互いに簡単な自己紹介や趣味の話を交わしながら、言葉だけではなく表情やジェスチャーを使って意思疎通ができたときは、大きな達成感を感じました。この経験は、語学学習に対するモチベーションをさらに高めてくれました。
最後に訪れた北京では、中国人民大学の外国語学院を訪れ、日中両国の学生同士で交流する機会を持ちました。その中で特に印象に残っているのが、「中日青年交流活動」です。中国側の学生たちが披露してくれた伝統舞踊や太極拳など、非常にレベルの高いパフォーマンスに感動しました。文化に対する誇りと熱意がひしひしと伝わってきて、自分ももっと日本のことを紹介できるようになりたいと強く感じました。
そして、北京で訪れた万里の長城は、私にとって特別な意味を持つ場所でした。というのも、私は映画『ベスト・キッド』が大好きで、その中で主人公が万里の長城の上で修行するシーンが強く印象に残っていたからです。実際にその場に立ってみると、映画で見た風景が目の前に広がり、まるで自分もその物語の一部になったような感覚になりました。延々と続く石の道と、そこから見下ろす広大な風景には、言葉にできない迫力がありました。
今回の中国訪問を通じて、語学の学びは単なる言葉の習得ではなく、その背景にある文化、人々の考え方や生活を理解することでもあると改めて感じました。そして、実際に現地を訪れて人と話すことで、教室では得られない「生きた中国語」に触れることができたと思います。今後もこの経験を生かして、さらに中国語の勉強に励むとともに、異文化理解を深めて

いきたいです。また、初めて中国や中国人に対して抱いていた印象は、「街が汚く、性格の悪い人が多い」というネガティブなものでした。しかし、実際に現地で多くの人と関わる中で、その印象は大きく変わりました。中国の人々はとても親切で、特に自分と関わった人には深く尽くしてくれる優しさを持っていると感じました。人に対する興味が少ないからこそ、いざ関係ができると誠実に向き合ってくれる、そんな魅力を発見できた旅でした。

「新たな中国」

3－B 城西大学 小峰 瑠瞳

5 月 24 日～5 月 30 日の 7 日間、今までにないぐらい貴重な体験をした。2025 日中友好大学生訪中団に参加したきっかけは、先生から勧められたことだった。正直、最初は軽い気持ちで参加を決めた。しかし、実際に中国に行き、中国の伝統や魅力を肌で感じたことでこの訪中団への参加がもの凄く素晴らしいものになった。

この 7 日間で、私達は中国の上海、山西省、北京を訪れた。

まず 1 日目は、上海のジンマオタワー88 階の展望台見学をした。そこからは、上海の街を一望することができ、そこから見える景色に圧巻した。黄浦江クルーズ船では、上海ならではの高層ビルがライトアップされていて、夜景がとても綺麗だった。

2 日目は、上海歴史博物館を訪れた。そこでは、古代から近代までの上海の歴史を、タッチパネルや映像技術を使った展示を通して、楽しみながら歴史を学ぶことが出来た。田子坊での散策では、お洒落なカフェや可愛く装飾された建物が並んでおり、散策を楽しんだ。

3 日目は、雲岡石窟で大きな仏像を見学した。そこでは中国における仏教彫刻芸術の初期の作品が展示されており、仏像の表情や装飾を見ることで、仏教の奥深さを知ることができた。華厳寺では、古代中国の建築や繊細な仏像を見ることができた。

4 日目は、山西省の太原にある晋祠を見学した。聖母殿の近くにある難老泉は歴史的な泉であり、中を覗くと水がとても澄んでいて水底まではっきり見ることができた。道中には森林があり、自然豊かな環境のため、心が落ち着いた。平遥古城では、全長 3.4km、高さ 10m 城壁が特に印象に残った。城壁の上を歩くとそこからは平遥古城を一望でき、絶景だった。平遥には古い街並みが残っていて、古い木造建築や伝統的なお店が並んでおり、そこでお土産を買うことができた。

5 日目は、山西大学を訪れ、日本語専門の生徒たちと懇談した。中国語が未熟な私は交流に不安を感じていたが、現地の学生は日本語がとても上手で、所々中国語を交えながら会話を楽しむことができた。中国の美味しい食べ物や日本で行きたい場所など、様々な話題で盛り上がった。山西大学の図書館には京劇で使われる頭冠と衣装が飾られていて、実際に身に付ける体験ができて、中国文化をより深く感じることができた。

6 日目は、中国人民大学外国語学院を訪問した。中国人民大学の 1 年生と沢山話をすることができ、校内も案内してもらった。中国人民大学の敷地はとても広く、1 つの街のようだった。校内を自転車で移動する学生も見られ、日本の大学とは違う点が多く見られて興味深かった。中日青年懇親会では、日本と中国の双方が発表を行い、中国ならではの武術やダンスを見ることができた。これをきっかけに、さらに中国文化を理解したいと強く思った。

最終日は、万里の長城を見学した。中国でもっとも有名といっても過言ではない万里の長城に実際に登ってみると、急な階段が続いていて、段差もバラバラで、一段一段がとても高くなっていて、登るのは想像以上に大変だった。しかし、上から見る景色はとても素晴らし

いものだった。
今回、2025 日中友好大学生訪中団に参加して感じたことは、大都市の建物の多くがとても高く、1 つ 1 つがとても大きいということだった。また、デジタル技術の進化が非常に進んでおり、モバイル決済や顔認証、学校内でのデジタル化が印象的だった。プライバシーやセキュリティに気をつけながらも日本も中国のこうした技術を参考にすることで、より良い社会が築けるのではないかと感じた。今回、初めて中国を訪れ、多くのことを学んだ。これまで、テレビやインターネットで見ていた中国の印象とは大きく異なり、中国の文化や技術をもっと深く知りたいと強く思うようになった。

「中国では新発見がたくさん」
３－B　静岡文化芸術大学　鈴木日菜

訪中団での中国旅は、ゼミの先生の一言から始まりました。訪中する以前は中国にあまり関心がなく、なんとなく中国語を履修する程度の関係でした。
訪中して第一に発見したのは、その都市の美しさです。中国と聞くと大気汚染やゴミ問題が念頭に浮かびます。しかし目に入ったのは綺麗に整備された道路、それも自転車・オートバイ専用レーンが設けられ、歩道には緑が生い茂っています。訪中以前思い描いていた中国の風景とはまるで違いました。ビル群が立ち並び圧迫感のある景観と思いきや緑化が進むことで自然との調和がよく取れています。
さらに移動すると、どの場所でもシェアサイクルが進んでいることに気づきます。日本では最近になって主流になりましたが、地方都市への普及はまだまだのように思います。中国では自動車のみならず歩行者に優しく、徒歩では行き届かない部分にシェアサイクル事業を取り入れ、良い都市空間が形成されていると考えました。
今回の訪中では様々な歴史的遺産を訪れました。日本とはスケールが違います。時代を跨いだ建物や何百年、何千年前の技術とは思えないような彫刻を次々と鑑賞します。中国といえばIT大国という人も多いと思いますが、それは五十音のあ行を話すようなものです。全て見るには時間が足りないほどのものに今回の訪中では出会いました。私は歴史が苦手で興味がありませんでしたが、ガイドさんから話を伺うごとに、その面白さをひしひしと感じました。
きっと今回の訪中団で一番遭遇した（一番動揺した）場面は豪華な食事です。大きな円卓を数名で囲み、各々が食事をとります。最初に出ているのは前菜で、それだけでも５皿はあります。恐ろしいのはここからで、メインが出て、ご飯が出て、デザートのフルーツまで出てくるのです。毎食お腹いっぱいです。日本では残さず食べる文化を学びますが、中国では残す勇気を学びます。どんなに美味しくても一つの料理を食べすぎてはいけません。それだけで終わる食文化ではありませんから。
ここまで私の好きなことをたくさん書きましたが、これから書くのは私の中国への想いです。今回関わったどの人も優しく接してくれました。これは簡単なことではありません。私の中国語能力はぼちぼちで、相手の方を言語の面で困らせる場面がいくつもありました。それでもどの方も翻訳機を出して話を聞いてくれたり、ゆっくりと中国語を話してくれたり、配慮のある行動をとってくださいました。中国の日本語学生との交流の際は、相手の日本語を最後まで聞くよう配慮しました。交流とは本来こうあるべきと思います。相手の所属で判断するのではなく、相手の人そのものとの交流が相互理解として有効ではないでしょうか。私はこれからの人生、相手に配慮し受け入れる寛容さの欠けた人物にならないようにします。私１人が次世代を担うわけではありませんが、１人の考えが大勢に伝播することはしばしばありますから、私の姿勢が良ければ、皆も背筋が伸びることでしょう。正直、大学にい

る間くらいでしか中国との関わりはないだろうと感じていましたが、今回の体験で中国と人や文化など何かしらの分野で関わり合いを続けたいと私の心に変化がありました。
このような転機をもたらしてくれた日中友好協会、中日友好協会の皆様、現地の方々、3-Bの皆、全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「訪中の感想と学んだこと」

3－B 静岡文化芸術大学　園原花織

日本における中国人のイメージは決して良いものではない。私にはとても仲の良い中国人の友人がいる。彼女はとても優しく、周囲に気を配る温かい人柄であり、いわゆる日本人が持つ中国人のステレオタイプとは正反対の性格である。彼女との交流を通して、私たち日本人が抱いている中国へのイメージに対し、疑問を抱くようになった。「反日感情の強い国」「自己主張が強く、マナーが悪い」これらのネガティブな印象は個人間やメディアによって形成されたものであり、現地訪問や現地人との直接コミュニーケーションを通して「真の中国」を知りたい、このような思いが訪中団参加の経緯となった。今回の日中友好大学生訪中団に参加するにあたり、「実際の交流を通して、両国の相互理解を深め、正しい知識を持つことで良好な日中関係に繋げる」「事実に基づいた中国観を持ち、中国の人々にも日本の魅力を知ってもらう」という２つの目的を設定した。これら想いをもって日中友好大学生訪中団の一員として、１週間３都市を訪問し、視察や交流を通して体験した感想をまとめる。

まず、大都市さながらの上海、北京の街並みが印象的であった。特に中国１の金融センターであり、ビジネスの先端都市である上海には煌びやかで、日本の東京ですら見ることのできない天を仰ぐほどの高層ビル群に圧倒された。夜になると煌びやかにライトアップされる東方明珠塔はまるでその発展と技術を象徴するようであった。一方、中国の古都の一つである山西省太原市で訪れた雲崗石窟や華厳寺、平遥古城などでは中国約 5000 年の歴史の一片を垣間見ることができた。北京でも華やかな都市部から離れ、万里の長城を訪れると教科書でみたあの史上最大の建造物に息を呑んだ。これだけの壮大な長城を煉瓦と石を積み上げて人力のみで作り上げたのかと思うと太古からその圧倒的な国力を有していることがわかった。

次に、現地の人々、現地学生との交流が思い出深く、心温まる経験となった。今回は山西大学日本語専攻、中国人民大学外国語学院の学生たちと交流をした。彼らとの交流を通して、両国の未来を担う存在として互いの国に対し、何に関心を持っていてどうなっていきたいのか想いを馳せることができた。互いに相手の国の言語で相手の国の歌を歌い、自国の魅力溢れるパフォーマンスを披露しあった。日本に帰ってきた今でも WeChat を通して連絡を取り合っている。また、中国大学生だけでなくガイドさんやホテルの方々、今回の訪中で出会うことができた全ての方々からの温かい歓迎を受け、より多くの日本人に中国に訪れ、彼らの温かい国民性を知ってほしいと思った。勿論、サービスやおもてなしの面で違いはあるが、空港などで困っていれば必ず手を貸してくれ、私たちの拙い「谢谢」の言葉にも必ず「不客气」と返してくれる彼らの笑顔にはその愛ある国民性が表れていた。

今回の訪中団での経験を通して「私は中国が大好き」だと感じた。そして、わたしが大好きな中国の魅力を多くの人に知ってもらいたい。今回の経験のように日中間で 1 人でも多くの人が実際に現地を訪れたり、現地の人々との交流を通して相手国に想いを馳せること

ができたら、日中関係はより良い方向に進んでいくのではないだろうか。今年は日中戦争及び第二次世界大戦が終結して 80 年目にあたる。このような意味深い年に大学生訪中団の一員として中国に訪問することができたことに感謝し、今回中国でできた友人たちとかけがえのない沢山の思い出を胸に「真の中国」を発信することで日中相互理解の一翼を担いたい。最後に、今回運営をしてくださった日中友好協会、中日友好協会の皆様、現地の方々、学生の皆、全ての方々に感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

「自分で体感した中国」
3－B　関東学院大学　鷹野羽也斗

今回の訪中は多くの学びと気づきを得られる刺激的な 7 日間となった。その中で印象に残っていることを振り返りながら以下に記していこうと思う。

私は今回の訪中団で初めて中国を訪れた。正直に言うと渡航前の中国の印象はあまりよいものではなかった。私は大学で中国語や中国の文化について学んでいたが、その一方でメディアや SNS で流れる情報は中国の大気汚染やマナーの悪さ、横柄さなどの中国に対するネガティブな内容が多く、日本人と中国人が互いに嫌悪感を抱いているように感じていた。しかし、そんなマイナスな情報を鵜呑みにして同じように嫌悪感を抱くよりも、実際に訪中し自分の目で見て肌で感じることでより深く中国の歴史や文化について理解できるのではないかと思い参加を志望した。

最初に訪れた都市、上海では高層ビルの高さに圧倒された。ただし、ただ高いだけではなく建物のデザインに工夫が凝らされており、それぞれに個性を感じられた。また、夜のクルーズ船から見た上海の夜景は天気にも恵まれとても美しく、大気汚染を感じない澄んだ空気だったと振り返る。街中では電気自動車や電動バイクが走っており、大気汚染の改善に向けた取り組みが進んでいると感じた。

２日目には上海を離れ山西省へ向かった。山西省では雲崗石窟、華厳寺、晋祠、平遥古城と中国の歴史遺産を訪れる機会があり、写真だけでは伝わらない衝撃で、実物を見ることでまるでタイムスリップしたかのような体験をした。歴史遺産を通じて中国の長い歴史の中で育まれてきた文化や伝統の奥深さを肌で感じることができた。また、山西省内での移動だけでなく上海から山西省の飛行機や、山西省から北京の高速鉄道の移動など辛いと感じる場面もあったが、それだけ中国の広大さを実感できる貴重な経験となった。

５日目には山西大学、６日目には北京にある中国人民大学外国語学院を訪問し中国の学生と交流する機会を得た。中国人の学生の方々は大学内を案内してくださり、日本の食やアニメについて質問をすると一生懸命日本語で答えてくれる姿勢や中国人大学生による日本の歌を日本語で歌うパフォーマンスは感動し中国とのつながりを感じた。また、宿泊したホテルのバイキングやレストランのスタッフの方々も丁寧で心のこもった接客をしてくださった。私の中国語が拙くても嫌な顔をせず対応してくださる姿に深く感動した。日本にはおもてなしの精神があるが、中国でも変わらず人の優しさや温かさ、そして丁寧さを強く感じた。

今回の訪中を通じて、中国に対する印象は大きく変わった。メディアや SNS は 14 億人いる中国人の一部や、中国のごく一部の地域の情報を発信しているだけであるが、それを鵜呑みにして知った気になっていたことが恥ずかしく思える。確かに意見や感情の違いはあるが、お互いは人間であり話し合うことができる。まずお互いのことを理解し尊重することが日中友好関係を築くことの基盤であるように考える。「わたしにはなにができるのだろう」

その後の小さな行動が日中の理解を深めることになるかもしれないし、異文化交流を促進することもある。これからも学び、多様な価値観を尊重し続け自分ができることを探していきたい。その第一歩として今回の訪中で得た学びや感動、つながりをより多くの人に伝え、日中友好の輪を広げていきたい。

最後になりますが、この度は日中友好大学生訪中団の一員として中国を訪問させていただき、非常に貴重な経験となりました。この訪中団で出会ったすべての方々、また訪中団に関わってくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

「訪中を通しての自分の中国に対するイメージの変化―自らの中国語レベルも併せて―」
3－B　関西大学　田中志帆

「中国」というと漠然としたイメージとして、キャッシュレス文化が進んでいて、上海は非常に発展していて夜景がきれいらしい、しかしほかの地域は山や自然が前面に推し出されている、というものをもっていました。そして同じアジア文化圏、昔からずっと日本と関わりのあった国ではあるものの、なんだか閉鎖的というか排他的というか、遠い存在に感じていました。最近は SNS の発展から海外版 TikTok でも抖音の動画が見られるようになったり、海外からでも中国サイトにアクセスしやすくなったりしましたが、とはいってもやはりなんだか遠い存在であるとぼんやり感じていました。

そして実際に中国に行ってみて、イメージしていた通り、キャッシュレス文化の浸透率の高さに驚きました。お賽銭や、景色を見られる望遠鏡など、そんなところまでキャッシュレスなのか！と驚いてしまうような場所もありました。街中を見てもおじいさん、おばあさんが何の苦も無く携帯を用いて決済をしている様子がたくさん見られました。日本ではまだまだ考えられない光景だなと感じました。実際にその文化の中で生活してみての率直な感想ですが、体感として便利すぎて日本でもぜひこの文化を…！と感じました。ただ、閉鎖的というイメージは、完璧にとは言いませんが覆されました。観光地をまわっていても、中国人の方々がフレンドリーに話しかけてくれて日本人だとわかると、すぐに日本について話してくれたり、中国語習っているの？と聞いて下さったりなどとても話しやすかったです。そして大学での交流では、中国人の大学生の方々も日本に興味を持って日本語を学習してくださっていることから、非常に私たちにフレンドリーでうれしかったです。大学生の方々と関わってみて感じたことは、自分の勉強レベルの低さです。大学に入って 1 年しかまだ日本語を勉強していないという学生でも、日本語を用いて話すことができていて、自分は 3 年も中国語にかかわってきているのに本当に情けないと感じました。ただそれと同時に、自分ももっと努力しなければならないと鼓舞されました。そして、自分の大学にもそのような留学生が多くいるので積極的にその環境を利用してより中国語のスキルの向上につなげたいと感じました。

また、私は現在大学で中国語について大陸での中国語と華語を比較研究しています。それについても実際に中国に、たった 1 週間という短い期間ではありましたが、実際に足を運ぶことで感じた発音の違いを材料として得ることができました。例を挙げると、儿化です。今までは台湾にしか行ったことがなかったので、一方的な実体験からのものになっていましたが、こうして現地に訪れることができたので、うれしいと同時に非常に貴重な体験ができたと感じています。

そして中国のイメージとして「自然」と挙げましたが、歴史的遺産との共存の仕方が非常に上手であると感じました。手を加えて歴史が失われないようにしていくというのが私にとっては驚きでした。しかし、非常に観光がしやすく、気軽に歴史について触れられる環境

があるというのが素敵で、実際に雲崗石窟を見た時にはその歴史の奥深さに圧倒されました。

今回訪中団として中国の 3 か所を訪れたことは、1 週間という短い期間にもかかわらず、自分の人生の大きな場所を占める経験になったと感じています。出会ったかけがえのない仲間とグループでともに行動し、一緒に同じ体験をしたということが私の記憶に深く刻まれました。漠然と遠い存在だと感じていた中国という国を今回の訪中を通して、意外とそうではなく、もっともっと関わっていきたいと思えたことが人生の幅を広げることになると感じています。これからも仕事の中でぜひ中国にかかわっていきたいと感じ、日中友好の架け橋となれたらうれしいと思いました。

「訪中を終えて」
3－B 釧路公立大学　玉臺将希

今回の訪中を終えて、私の中で中国に対する印象は大きく変わった。もともと私は、中国という国に対して漠然とした距離感を感じていた。ニュースや SNS で目にする情報の多くは、政治的な対立やマイナスの話題が中心であり、正直に言えば、良い印象は持っていなかった。しかし、今回の 7 日間の訪中を通じて、実際に現地の空気に触れ、人々と直接言葉を交わし、目で見て肌で感じることで、自分の中にあった偏見や先入観は大きく揺らいだ。
最初に訪れた上海では、その都市の発展ぶりに驚かされた。高層ビルが立ち並び、街は活気に満ちており、近代的な都市の姿がそこにはあった。一方で、山西省では歴史的な街並みが残る平遥古城を訪れ、中国の伝統や文化の奥深さにも触れることができた。こうした地域ごとの表情の違いもまた、中国という国の奥行きを感じさせるものであった。
中でも最も印象に残っているのは、山西大学での現地学生との交流である。言葉の壁はあったものの、互いに真剣に理解し合おうとする姿勢があり、話すうちに自然と打ち解けていった。彼らは日本に対して強い関心と好意を持っており、歴史やアニメ、社会制度まで幅広く日本について質問してくれた。私も、中国に対してもっと知りたいという気持ちが芽生え、彼らと話す時間がとても貴重なものとなった。この経験を通して、互いを知ることこそが、真の相互理解と友好につながる第一歩であることを強く実感した。
また、3 都市を巡ることで、中国の政治的・文化的側面についても多くを学ぶことができた。ガイドの方や現地の方々も非常に親切で、日本から来た私たちに丁寧に接してくれた。どの地域でも共通して感じたのは、人々の温かさであり、「中国＝敵対的」という先入観がいかに表面的なものだったかを痛感した。
さらに、今回の訪中団には、全国から集まった日本の大学生が参加しており、私にとってはその点も非常に大きな学びだった。私は現在北海道の釧路市という地方に住んでおり、普段は全国の学生と交流する機会は多くない。しかし、この訪中を通じて、多様な価値観や背景を持つ仲間と出会い、一緒に学び、考えることができた。彼らとの議論や日常の何気ない会話は、自分の視野を大きく広げてくれた。
この 1 週間は、私の人生にとって非常に意味のある時間となった。訪中前と比べて中国に対する見方が変わったのはもちろん、これからは「隣国」とどう向き合っていくかを、自分自身の視点で考えるようになった。国同士の関係だけではなく、人と人とのつながりの中で相互理解を深めていくことの大切さを、私は今回の経験から学んだ。
最後に、この貴重な機会を提供してくださった関係者の皆様、そして一緒に訪中を経験した仲間たちに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「触れて知る、中国の今」
３－B　フェリス女学院大学　床次和美

私はこのたび、日中友好協会および中日友好協会の推薦を受け、一週間の訪中団に参加しました。訪問先は上海、山西省、そして北京。中日青年友好交流大会にも参加し、CCTV に報道されるほどの大規模な催しにも立ち会いました。多くの貴重な経験を通して、「中国とは何か」「隣国とどう向き合うか」を考える時間となりました。

きっかけは、かつて出場したスピーチコンテストで、中国を訪れた経験を熱く語る参加者たちの姿に触れたことでした。私は中国に行ったことがなく、彼らの言葉にある中国は、私の中の漠然としたイメージとはまったく異なるものでした。「自分の目で見てみなければ分からない」。その思いが強くなり、今回の訪中に参加することを決めました。
出発前、中国にはどこか複雑で近づきがたい印象がありました。メディアを通じて流れる情報には、緊張感や対立を強調するものも多く、中国の人々の日本に対する思いも年代によって大きく異なるのだろうと感じていました。だからこそ私は、現地の景色、音、空気を五感で感じ、特に観光地としては珍しい山西省における中国人の日本人への感情や、中国芸術のあり方に触れたいと期待していました。

各都市では、それぞれの特色ある表情が印象に残りました。上海では、近代と歴史が融合する都市の姿に圧倒され、夜景クルーズでは右手に高層ビル群、左手に歴史的建築が並ぶその対比に、中国の芸術性へのこだわりを感じました。山西省では、雲崗石窟や平遥古城などの歴史遺産を巡りながら、日本人の名前を見て興味を持って話しかけてくれる地元の人々の温かさが心に残りました。中日青年友好交流大会では、各地の大学から来た学生たちが、中国の伝統文化を現代の芸術として見事に表現しており、古き良き文化に誇りをもって継承している姿に感銘を受けました。また、特に印象深かったのは、訪問した山西大学と中国人民大学で、どの大学の学生も日本語を熱心に学び、心から私たちを歓迎してくれたことです。「日本が好き」と言ってくれる学生たちの存在は、どれだけ安心を与えてくれたかわかりません。

バス移動中でさえ、学びの連続でした。隣に座った友人と、信号機の高さの違いや赤い看板が多い理由などを話しながら、車窓から見える景色に目を奪われました。高層ビルが立ち並ぶ上海、自然豊かな山道の山西省、生活感あふれる北京の街角。国が違えば、こんなにも「当たり前」が変わるのだと感じました。
さらに、今回一緒に旅をした友人たちの姿勢にも、大きな刺激を受けました。中国をよく知っている人も、あまり知らなかった人も、みんなが何かを吸収しようと前向きに行動していたのです。毎日一つの中国語のフレーズを覚えて、実際に使ってみたり、お互い教え合った

り、店員さんの話し方に興味を持ってその場で一緒に意味を考えたりと、学びへの意欲がとても印象的でした。こうした仲間たちの行動や心のあり方からも、多くのことを学ばせてもらいました。

今回の訪中を通して、私は「知っているつもり」でいた中国が、実はとても多様で、奥深く、温かい人々に満ちた国であることに気づきました。日本にいては触れられない現実が、目の前に広がっていたのです。限られた報道だけで他国を判断するのではなく、実際に訪れ、自分の目と心で感じることの大切さを学びました。また、私自身も一人の日本人として、隣国とどう向き合っていくかを考えるようになりました。「本当の中国」を知る努力を怠らず、そこに暮らす人々の価値観を尊重すること。それが、平和と理解の第一歩なのだと感じています。

最後に、この旅に送り出してくださったすべての方々に、心からの感謝を申し上げます。そして、これからも多くの若い世代がこのような体験をし、お互いの文化を理解し合える日がくることを願っています。

「人と人として」
3－B 立教大学　中家礼人

「人間みんな良い所と悪い所がある。そこで、その人の良い所を見つける方がいい。悪い所だけを見て距離を置いてしまうのはあまりにももったいない。」
これは訪中団から帰国後、祖父に中国のお土産と想い出話を持って会いに行った際、祖父が言っていた言葉だ。私は中国を訪れて実際に中国人と交流して本当にその通りだと思った。中国はこういう文化だから。中国人はこういう性格だから。中国人は皆こういう考え方だから。訪中前の自分はそう簡単に決めつけていたと気付かされた。

実際に訪中前、私は中国という国の良い部分よりもマイナスの部分を見ていたしどうしても目立って伝わっていた。そして中国人に対しても中国人はみんなどうせ日本人のことを嫌いなんだろう、だからわざわざこちらから知ろうとする必要はないだろう。と考えていた。そのような大半の日本人が考えているであろう中国に対するイメージを私も持ちながら長年過ごしてきた。そんな中、大学生になってふと中国に興味が湧いた。私の大学がある池袋は多くの中国人が暮らし中国料理店も多くありそれらの店を訪れることもしばしばあった。店員さんも客も中国人のため店内は中国語が飛び交っている。まるで自分が中国に来ているかのような店内。この人たちの母国、中国を自分の目で見てみたいと思った。そんな時にご縁で訪中団に参加する機会をいただいた。私は「中国人の暮らしや街の雰囲気を見て感じて自分なりの考えを持つこと」を訪中団に参加するに際しての目標として決めた。

右側通行、路上でスイカを売る光景、自分の意見はしっかりと隠さず伝える中国人。全てが新鮮だった。一方で、日本と変わらないこともあった。「謝謝」と笑顔で言うと笑顔で返してくれることだ。その一連の何気ないやり取りのうちに交流というものを難しく考えすぎていたと気づいた。現地の方はみんな笑顔が素敵でその笑顔が見たくてこちらも自然に笑顔になっていた。1週間の短い期間に接した数人の中国人でさえみんな話し方、考え方、声のトーンも全く違った。当たり前のことではあるが、違う国籍、文化の人達とひとくくりにするのではなく人ひとりと話すことの重要さ、そして面白さを学んだ。

この一週間の訪中団に参加してこれからの中国との関わり方についての考え方は大国として、隣国として今後付き合っていかなければいけない国からお互いを尊重しながら今後とも付き合っていきたい国へと変わった。それは冒頭の祖父の言葉で言うところの「良いところ」を今回の訪中で見つけられたからだ。今後も中国に関する良いニュース、悪いニュースどちらもたくさんあると思う。しかし、今までとは違い全ての出来事を日本と中国ふたつの国のことと大まかにまとめることなく、国同士の話と自分が中国で一週間過ごし感じた自分の中での中国を区別して考えるだろう。愉快な中国人ガイドさんや中国人の暮らしのこ

とや中国のロックバンドなどを教えてくれた山西大学、北京人民大学で交流した学生など、中国と聞いて思い出す人々ができたのも非常に貴重だと感じる。
訪中団で得たことは中国との関わり方に留まらない。あるひとつの事柄を決まった視点で判断する前に一度立ち止まり異なる視点からも考えてみようとする行動すること。これは今後の人生においても非常に重要であると感じる。対立し相手を考えないようにするのはある意味で簡単で相手を理解しようと努めるのは気力がいることだろう。しかし、対立・無関心はあまりにももったいないと中国という面白い国を訪れて思った。中国という国の歴史、中国人の暮らしにより興味が湧いた。これからも自分なりに興味・関心を持ち続けていきたい。
最後に、今回の訪中団を運営してくださった引率の日中友好協会の方々、中日友好協会、日中友好協会、中国政府に感謝致します。貴重な機会をありがとうございました。

「訪中体験を通して変わった中国へのまなざし」
３－B　東北大学　中田康介

これまで私の中での中国のイメージは、どこか騒がしく、政治的にも複雑で、文化も私たち日本人とは大きく異なるというものでした。しかし、実際に現地を訪れ、人々と交流し、自分の目で見て体験することで、その印象は大きく変わりました。多くの驚きや学びに満ちた1週間でした。

実際に訪れてまず強く感じたのは、中国の学生たちの勤勉さと、その姿勢に対する尊敬の念です。訪問先の大学で案内してくれた中国人学生たちは、私たちと年齢も近いのに、見事な日本語でキャンパスを案内してくれました。言葉だけではなく、案内の内容や私たちへの気配りからも、彼らがどれだけ真剣に日本語と向き合ってきたのかが伝わってきました。彼らの姿を見て、自分はここまで熱心に何かを学んできたかと自問し、非常に刺激を受けました。

滞在中には、文化の違いにも数多く触れました。とりわけ食文化やトイレ、交通のマナーなど、日常のあらゆる場面で「違うな」と感じる瞬間がありました。例えば食事では、量の多さや味の強さ、常に炭酸飲料が出てくることに最初は驚きつつも、次第にその奥深さや地方ごとの違いに興味が湧いていきました。また、交通ルールでは、日本以上に密度が高くクラクションが頻繁に鳴り響く中でも人や車がうまく共存していて、その柔軟な“ローカルルール”に最初は戸惑いながらも、次第に「これはこれで成立している」と感じられるようになりました。特にレンタル自転車の文化はすごく便利だと感じました。こうした体験は、自分の「常識」がどれほど日本的なものであったかを教えてくれました。

一方で、雲崗石窟や平遥古城など、何千年という時を超えて今に残る歴史的建造物に触れられたことも、大きな学びとなりました。雲崗石窟の巨大な仏像群は、その彫刻技術の精巧さとスケールの大きさに圧倒され、言葉を失うほどの感動がありました。教科書で知っていたつもりの歴史も、実際にその空気を感じ、手で触れ、目で見ることで、よりリアルなものへと変わっていきました。日本の文化や思想の多くが中国由来であることを改めて実感し、その“源流”に直接触れられた貴重な体験でした。

そして都市部では、中国の急速な成長を象徴するかのような個性的な街並みと雑多な雰囲気にも強く心を動かされました。秩序だっているとは言いがたいけれど、人やモノ、音、匂いが混ざり合うその活気には、どこか人間味のあるエネルギーを感じました。整然とした日本の街並みとは正反対で、混沌の中にこそある中国の魅力を知ったような気がしました。

こうした数々の経験を経て、私の中国への印象は大きく変わりました。訪れる前は、どこか中国という国に距離を感じていましたが実際に人と接し、文化に触れ、歴史を学ぶ中で、それまでメディアや他人の言葉を通して作られていた中国像がいかに偏ったものであったかに気づかされました。今では、中国は身近で、学ぶべき点が多く、そして共に未来を築くべき重要な隣国だと感じています。

帰国後、私は友人たちに中国の話をするとき、「めちゃくちゃ実りある1週間だった、思っ

ていたよりずっと素敵な国だった」と自然と口にしています。そしてそれは、ほんの 1 週間という短い時間ながらも、自分自身の目で見て、耳で聞き、心で感じたことに基づいた実感です。

今回の訪中体験は、私にとって単なる海外研修以上のものでした。異文化に触れ、固定観念を壊し、新しい視点を得る。そんな貴重なプロセスを通して、私は自分の中の世界を少し広げることができたと思います。これからも、この体験を忘れず、偏見にとらわれずに人と接し、世界を見つめていきたいと思います。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆さま、現地で温かく迎えてくださった中国の学生の方々、そしてこの旅を共にした仲間に心より感謝申し上げます。

「小さな会話から始まる相互理解」

3－B　筑波大学　羽村亜海

今回、私は二度目となる中国訪問の機会を得た。上海の浦東空港に降り立った瞬間、以前訪れた時の記憶が一気によみがえり、「ああ、中国に戻ってきた」という懐かしさと高揚感に包まれた。今回の訪中団では、わずか 7 日間のうちに上海、山西省、そして北京という三都市を巡るという非常に密度の高い日程であった。各都市はそれぞれ異なる文化的・歴史的背景を持ち、訪れるたびに新たな中国の一面を発見できた。

特に印象的だったのは、大学生同士の交流が二度設けられていたことである。新しい出会いが生まれ、若者同士で直接話し合う機会は非常に貴重だった。私たちが交わしたのは、学校生活や最近流行っている音楽・映画など、日常的で親しみやすい話題が中心だった。事前に政治的な話題や相手が返答に困るような内容は避けるように言われていたため、深い対話は難しかったが、こうした何気ない会話こそが信頼関係を築く第一歩だと感じた。例えば、K-POP アイドルグループの話題で盛り上がったり、日本のアニメや漫画について語り合ったりすることで、国境を越えて共通の趣味を持つことの喜びを実感できた。こうした共通項があるからこそ、初対面でもすぐに打ち解けることができ、互いの距離が縮まる感覚を得られた。

しかし、私はこのような交流を通じて、改めて「日中の相互理解」とは何かを考えさせられた。昨今、日中関係において「相互理解」の重要性が叫ばれる機会は多い。しかし、私たちはその言葉をどれだけ深く考えているだろうか。相互理解の重要性を唱える一方で、その内容や方法について思考停止に陥っていないか。今回の訪中団での学生交流を振り返ると、交わされたのは「対話」というよりも「会話」、「相互理解」というよりも「情報交換」と表現するほうが適切であると感じた。もちろん、こうした情報交換を軽視するつもりはない。むしろ、何気ない会話の積み重ねこそが、真の対話への第一歩となる「信頼関係」を築くためのきっかけだと考えている。

ある書籍では、対話を「まだ親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは、親しい人同士でも価値観が異なるときに行われる摺り合わせ」と定義している。対話とは、相手と自分の間にある「違い」と向き合う営みである。私たち学生が行った情報交換を、単なる雑談に終わらせるのではなく、今後は相互理解や対話のレベルに昇華させていくことが求められていると感じた。

相互理解とは、相手の立場に無理に同調することではない。相手が何を、なぜそのように考えているのかを知ろうとする「営み」そのものが相互理解である。たとえ意見に納得できなくても、その背景にある経験や価値観に耳を傾けることで、初めて本当の意味での理解が始まる。今後、日中間で歴史認識や政治的立場の違いといった難しいテーマに向き合う場面もあるだろう。その際に大切なのは、相手の考えを「受け入れる」のではなく、「受け止める」姿勢だと私は考える。

このように考えると、今回の訪中団での経験は、まさに相互理解の入り口に立ったに過ぎない。しかし、何気ない会話を重ねることで信頼を育み、やがては難しい話題にも正面から向き合える関係を築いていく。その第一歩として、今回の訪問には大きな意義があったと確信している。今後、私たち若者が果たすべき役割は、相互理解という言葉を抽象的な理想に留めることなく、その具体的な実践を積み重ねていくことである。小さな会話から始まる対話の力を信じ、違いと向き合う勇気を持ち続けたい。

「訪中を通じての所感」
3－B　慶應義塾大学　横田周平

今回の訪中を通じて、私は中華人民共和国が持つ、国家としての「統一感」と「将来性」を改めて実感した。

第一に、街の随所に見られた多数の標語が「統一感」を物語っていた。日本ではあまり見ないほど多数の「I♡SH」といった地域愛の内容に加え、男性トイレの「向前一小歩 文明一大歩」といったものまで、その内容は多岐に渡る。ただ、そのいずれもが局所的に見られるのではなく、上海でも山西省でも北京でも似たような形で見られた。こうした特徴からは、中国国民の国民意識が浸透しており、それを国家も国民も望んでいるような印象を受ける。こうした国家的な「統一感」は日本での生活ではあまり感じないものであり、それを日本よりも遥か広大な国家が実現していることに驚かされた。

第二に、旅の様々な場面で中国の「将来性」を感じた。まず、上海大同太原北京と四都市を巡る道中、建設中の建物や高速道路に多数出合った。もちろん日本でも建設途中の建物は数多あろうが、その殆どが以前から建物のあった地域に再建する形式をとっている。一方、中国の場合は、何もない山肌や草原の地に一から建設しているものが大変多い印象を受けた。こういった点からは、中国の余力、更なる発展の可能性を強く感じざるを得ない。また、山西大学、中国人民大学の大学生の皆さんからは、学習始めて間もないにも拘らず、大変流麗な日本語を披露いただき、人財の豊かさを否応なく感じた。私たち日本人も、中国に負けず劣らない飽くなき向上心を持っていきたい。

さて、今年 2025 年 3 月に行われた日中韓外相会談において、首脳らの背後に飾られた書に注目が集まったことは記憶に新しい。「解衣」と記されたその書は、『史記』「淮陰侯列伝」を出典とする古代中国の成語であった。この言葉は、敵味方の区別なく手厚いもてなしをしてくれた劉邦に対し、韓信が感謝する文脈で登場する。

「解衣推食」と四字熟語の形でもしばしば見られるこの語は、元来「己の衣を解いて人に着せ、己の食を推して人に食わす」という字義から、「人に恩を施す」意味で用いられてきた。しかし、今日ではさらに、外交関係における相互扶助、互いを思いやり信頼で向き合うという意味でも使われている。改めて、この語を日本側が日中韓外相会談の場において、壁面に飾った意図を推察するに、日本としてはまさしく「解衣推食」の精神で日中外交を進めていきたいという意志の表明とも受け取れる。今回北京で中日青年友好交流大会に参加させていただいたが、一青年としても、この「解衣推食」の精神を忘れることなく、心をつないで共に平和を目指し、日中友好の一助となれる行動を目指していきたい。

末筆ながら、この度このような訪中の機会をいただき、中日友好協会はじめ中国側関係者各位の熱烈なる歓待をいただいたこと、衷心より感謝申し上げる。重ねて、日中友好協会の

関係者各位、訪中団の皆さんにも御礼申し上げる。